

令和5年度 看護実践研究委員会 活動報告

■委員名	委員長：鷺田幸一 副委員長：橋口周子 委員：片山恵・西池絵衣子・藤原功己・井上久美子・明石智子・矢野啓子・北野貞
■開催回数	7回
■活動目標	1. 県内の参加者・発表者のニーズをアセスメントして看護実践研究会を企画し、参加者数・発表者数の維持・増加を目指す。 2. コロナ禍での看護実践研究会のあり方を企画、検討する。 3. 看護職者の研究力をサポートする。（査読、発表資料など） 4. 看護実践研究会の査読方法の見直しを行う。 5. 看護実践研究会の投稿規定の見直しを行う。
■活動内容	令和5年度看護実践研究会の開催とそれに向けた企画委員会の開催 1. 看護実践研究会の概要 ・開催日：令和5年11月23日 ・対象者：県内の看護職者 ・参加者：86名（会場53名 オンライン33名） ・開催テーマ：「何だろう！どうしてなんだろう！看護の疑問を探求しよう！」 ・教育講演：テーマ「エビデンスを活用して看護の疑問を解決しよう！」 講師 県立はりま姫路総合医療センター 竹原歩 氏 2. 応募演題に対して、各委員が査読を行い、発表ができる形式に整えられるように複数回支援を行った。難しいケースに関しては委員会で情報を共有し、どのように修正を加えるかを検討した。 3. 発表者・参加者・査読を行なった委員会委員が交流を持ち、実践報告や研究を身近なものとして捉えてもらえるように、看護実践研究会の中で交流会の企画を行なった。
■活動の評価	1. 看護協会からホームページや文書で案内を行い、例年より少ない人数となったが、会場50名、オンライン30名の応募があった。 2. 昨年同様に会場およびオンラインのハイブリッド形式での開催となった。 3. 内容の充実を図り投稿者の意図が表現できるように、投稿者1人に対して3～4回の査読を行った。2名の辞退があったが、11名の演題が採択された。 4. 投稿規定の見直しを行い、論文の基本構成に沿った投稿が行われた。 5. 交流会を企画し、今年度初めて交流会が開催された。
■今後の課題	・実践報告・看護研究の抄録の完成度は施設によって差があり、発表までにある一定の基準に達することができるよう、投稿者1人に対して複数回のやり取りを行なっている。修正途中で辞退される投稿者もあり、抄録の質と投稿者の負担の折り合いについては引き続き検討が必要である。 ・査読のプロセスによって、投稿者の負担増加と共に、演題募集の敷居が高くないように、抄録の修正をどこまで求めるか、抄録の採択基準をどこに設定するかは委員会内で引き続き協議・共有していく。 ・演題の応募数が年々減少しており、演題の応募数を担保できるように、案内の方法や各施設への働きかけについて検討が必要である。 ・スライドの作成については、現時点で委員会の支援は行えておらず、発表者と各施設の管理者に委ねられている。スライド作成の支援方法については今後検討が必要である。 ・発表者・参加者・査読を行なった委員会委員が交流を持ち、実践報告や研究を身近なものとして捉えてもらえるように、今年度交流会を初めて企画し開催を行なった。次年度以降の交流会の企画・開催について再検討が必要である。